

[総合的な学習の時間]

自らの意志をもって主体的に行動するキャリア教育の実践

－演劇公演に向けた諸活動との関連付けを通して－

田口 秀行*

1 はじめに

今次、改定された学習指導要領総則では、各学校に応じた教育課程に基づいて、教育活動の質の向上を図るカリキュラムマネジメントの重要性が明記された。具体的には、学習を知識伝授型の活動で終始させることなく、地域や学校の実態、あるいは生徒の心身の発達段階や特性に応じて教科横断的な学びを構築することが求められることとなった。当事者意識をもちにくい今日の社会において、地域や学校、自分の日常生活に根差した活動を起点としながら、探求をデザインすることは、生徒にとってはもちろんのこと、教師にとっても大きな意味をもつといえる。

本研究は、三和区の小中学校で一貫して追求する子どもの姿「ふるさと三和を愛する子ども」の育成に向け、一人一人がいかに生きるべきかを問い、自らの意志をもって主体的に行動するための進路を実現するキャリア教育を構想し、実践した学習のデザインを示したものである。

2 先行研究の整理

(1) 学び手の視点からみた「総合的な学習の時間」の課題

大矢(2017)は教職課程に在籍する大学生に対して実施した小中高等学校で行われた総合的な学習の時間に関するアンケート調査を分析し、中学校で実施した総合的な学習について、主に社会性や協調性、コミュニケーション能力、問題解決能力を育む活動に取り組んだと回答しながらも、それらの力を「総合化するところまではっていない」という結果を得ている。

(2) キャリア教育における課題

文部科学省(2011)は、それまでのキャリア教育の課題について、体験活動が重要だという面だけをとりえ、「職場体験活動の実施をもってキャリア教育を行ったものとみなしたりする傾向」を指摘している。このような状態に至った背景を、キャリア教育が変化してきた経緯が十分に理解されてこなかったことに見出し、キャリア教育本来の理念に立ち返った認識を共有する必要があると指摘する声もある(小川・岡田2018)。こうした指摘を受け、技術・家庭科の家庭分野においてライフスタイルの確立をねらうカリキュラム開発(大本・阪本2019)や生徒会活動や特別活動との接続を意識した実践(天野2019)、大学との連携を図ったキャリア教育(但田2018)など、従来の職場体験に依存した取組とは異なる実践が積み重ねられてきた。

一方、学習指導要領が資質・能力中心にシフトし、「人間力」「コミュニケーション力」「論理的思考力」など具体像のつかみにくい「～力」が用いられることで、その実像が不問に付されたまま、これからの教育の未来像を理解したかのような錯覚に陥る危うさも指摘されている(吉岡2006, ペルグゼン2007)。これから先を見据えた時、各能力がなぜ求められているのか、その具体的な内容は何かなど、教育の根本を問う視点が必要といえる。

(3) 人生100年時代を見据えた上での課題

藤原直子(2015)は、超高齢化した日本において、退職後においても、生きがいをもって主体的に生きるためのキャリア教育が必要であるとし、「それぞれのライフステージ上で起こりうる課題に対処する力、求められる役割を果たそうとする意欲や力」の必要性を提起した。人は社会において労働者として生きるのみならず、学生、市民、家庭人、親、余暇人など複数の立場や役割を引き受けながら成熟するという面を加味したキャリア発達の再考を迫っている。

3 本研究の課題

以上の先行研究を概観することで、総合的な学習の時間に行われてきたキャリア教育の課題が4点確認できた。

*上越市立三和中学校

- ①コミュニケーション能力、問題解決能力などの力を関連付けて「総合化する」実践が不足していたこと。
- ②キャリア教育をめぐる課題として、その実践の多くを職場体験に依存しすぎてきたこと。
- ③様々な資質・能力が矢継ぎ早に出されることで、本当に目指すべき資質・能力が不問に付されてしまうこと。
- ④人生100年時代に突入することを鑑みた時、キャリア教育の視点として「労働」に限定されない新たなライフステージを視野に入れる必要があること。

以上を踏まえ、本研究では、キャリア発達の視点について、人生の様々な局面においても応用できる資質・能力とは何かを自ら問い、獲得しようとする態度を育成することをねらったキャリア教育を構想し、その成果と課題について考察することとする。

4 本研究の目的と方法

本研究は、生徒が他者と協力しながら自己実現を図る健全なキャリア発達を促すために、総合的な学習の時間において行われてきた様々な活動の一つのねらいの下に関連付けて構成し直した実践を取り上げ、その成果と課題について考察する。そのために総合的な学習の時間の年間活動計画を見直し、活動の最終地点を中学3年時に行う演劇公演とした。そのねらいは自らの人格とは無関係に付与される役割を引き受け、自分とは異なる他者を理解していくための活動を仕組むことで、長期にわたって求められるキャリア発達の青写真を生徒自身が獲得することにあった。

研究は平成30年度の第2学年生徒37名に対して、平成30年4月から令和元年7月の期間に総合的な学習の時間に実施した教育活動を対象とする。研究方法は、演劇鑑賞や職場体験、吉本新喜劇の観劇、異文化交流学習、演劇¹公演など、一連の関連性を図った活動から得た生徒の振り返りと各学期に行う学校評価用の生徒アンケートの経年比較等を検討対象とした。しかし、対象学年の生徒数は37名であり、母集団が小さいことから学年生徒から得られたアンケートの数値を信憑性の高いデータとみなすことはできない。そのため、様々な活動後に書かれた記述や行動の変容などを検討材料に加えながら、多面的に考察することとした。

5 実践の概要

(1) 総合的な学習の時間で育てたい力とその理由

終身雇用制や年金制度などの変化を原因として、雇用形態が変容し、労働人口の減少に伴って外国人労働者が増加し、多様な性のあり方をめぐる議論の中から新しい家族のあり方が模索されている。従来、当然視されてきた社会制度や人間関係が変動する今日において、互いに「知らない」ということを前提としながら、そこにとどまることなく、対話しながら関係を築き、かつ維持していく粘り強さが必要になる。そのためには、社会で生きることや働くことの意味を問うことが不可欠となる。

キャリア教育のガイダンス時に使用したスライド

<p>今の若者のいる状況は、私が中学生時とは大きく異なる！</p> <p>『学歴・競争・人生 10代の今知っておくべきこと』</p> <p style="text-align: right;">吉川徹 中村高康</p> <p>少しだけ紹介...</p>	<p style="text-align: center;">人生の流動化</p> <p style="text-align: center;"><昭和> <現在></p> <p>空年までこの金で働いて？ ローンが0歳で返済に？</p> <p>学歴や心で就職しよう！ リストラでどう？</p> <p>足が臭い！</p>
<p style="text-align: center;">人生の目標の多様化</p> <p>学歴、関係性、福祉、職業、洋服、環境、マナー、地元の産業、健康、多様な価値観</p>	<p style="text-align: center;">これからの総合的な学習</p> <p style="text-align: center;">～人(Person)の語源から～</p> <p>様々な人と「誠実」に向き合うとは… →その時々与えられる役割(仮面)を引き替えること →人格は一つでも、言葉や態度に柔軟な幅を持たせられること</p>

¹ 演劇の教育的意義については、集団づくりや学校生活の活性化、身体による表現活動など様々な視点から扱われてきた(富田1958)。また、演劇がもつ学問的意義について、川野(2013)は20世紀の政治哲学者ハンナ・アレントの思想をひも解き、公共性の概念を形成するうえで演劇の形式が重要な役割を果たすことを指摘した。川野は演劇における特性が、日常の自分とは異なる自己を演出するという意味での「仮面性」、見られる中でふるまうという意味での「舞台性」、物語や演者が置かれた立場に規定させられるという「立場性」にあるとして、これらの3つがアレントの政治哲学と密接に関連するとした。アレントによれば、公共性概念を形成するためには、古代のギリシャ人がもっていた「公的領域」(人々が活動と言論のやりとりを展開する政治的空間)と「私的領域」(生命を維持するための生産と消費を行う)という2つの領域に自覚的であらねばならない。こうしたアレントの思想を手がかりに、川野は「自分の心の素直な気持ちに向き合い、安定を得るというプロセスと相手の意見を聞いて広い視野で考えるというプロセスとを区別する」(川野2013.p6) ためにも、公的領域と私的領域の境目を取り上げ、それらを自覚するために演劇が有効であると説く。

複数の価値観や立場が錯綜する今日において、川野が指摘するように、演劇の特性である仮面性、舞台性、立場性を身に付け、他者に開かれた公共性の概念を獲得することは必要不可欠と考える。重ねて、演劇の3つの特性は、キャリア教育において求められる資質・能力を「総合化」するうえでも有効である。以上の理由から本実践のゴール地点を演劇公演に置くこととした。

そこで、キャリア教育が本格的に始まる2年生の総合的な学習の時間の枠の中で、演劇鑑賞や職場体験や修学旅行などの校外学習と関連付けながら、学校・地域・年代の異なる人と意思疎通を図り、人との関係の構築、維持の力が求められる活動場面を設けることとした。

(2) 総合的な学習の時間の年間指導計画とキャリア教育において求められる資質・能力との対応関係

月	キャリア教育において身に付けるべき資質・能力			
	人間関係・社会形成	自己理解・自己管理	課題対応	キャリアプランニング
第Ⅰ期「自己表現としての進路選択」				
4月				「私の夢」作文の作成
5月	自己実現のための自己表現を演劇形式で演習しよう。 (講師2名対応)		演劇「夢をかなえるゾウ」の鑑賞後、自分の夢について再考する。	
第Ⅱ期「人と関わり、社会で生きる」				
6月		職業適性検査の実施	職場体験先の検討・決定	
7月	職場体験に向けたマナー講習会		職場体験先への事前アポイントメント	
8月	職場体験(5日間)			
第Ⅲ期「自分の地域を知り、外に向けて発信する」				
9月			職場体験で得た知見をデジタルでまとめ、学校ホームページに掲載しよう。	
12月			自主自立のまちづくりに向けた地域自治体制度及び三和区の課題の共有	
1月	三和の将来への提言意見集約：三和区地域協議会メンバー	修学旅行で異文化交流会の準備(新潟の銘菓調べと購入)	演劇練習(配役・BGM等の決定)	
2月			演劇練習 講師対応	
3月	修学旅行 ・異文化交流学習 ・吉本新喜劇の観劇			
第Ⅳ期「これまでの学習を関連付ける」				
4月			演劇練習 講師対応	
5月	演劇公演(2回)		演劇練習 講師対応	
6月	デイサービス施設での演劇視聴及び演劇用ダンスの披露		三和区のたる太鼓演奏	進路学習 進学先アンケート
7月			さんわ音頭の継承普及活動 さんわ音頭継承普及会による伝達講習	三者面談
8月	さんわ祭り ・演劇用ダンス披露 ・たる太鼓演奏発表 ・さんわ音頭			三者面談

(3) 演劇づくりに向けた取組

① 様々な活動との関連

第Ⅰ期「自己表現としての進路選択」では、2年生の5月に鑑賞する芸術鑑賞教育を起点に据えた。ここで鑑賞する演劇「夢をかなえるゾウ～青春ロボット編～」は、高校3年生の主人公が将来の夢に向かう際に直面する様々な困難を主題として扱っている²。そこで、演劇鑑賞前に、あらかじめ「私の夢」と題した作文を書かせてから演劇鑑賞に臨み、鑑賞後、その作文を級友の前で発表する活動を設けた。明確に将来の夢をもち、堂々と発表できる生徒は数名にとどま

² この演劇は、自分の進路を表せずにいる息子と父親のすれ違いを扱っている。ロボット研究者になる夢を抱く息子(高3)に対して、父は自ら経営する鉄工所の後継者の道を歩ませたいと考える。ルール通りに歩ませようとする父とそれを拒む息子。息子は自分の意思を理解してもらい、進路実現を果たすためにも父親と対峙しなければいけない。この演劇には、自己実現のための意思表示というテーマも織り込まれている。

り、「夢をもつこと」と「自分の意志を明確に表現すること」がともに生徒自身にとっての切実な関心事になり得ていないことを学級全体で共有した。次に、5月末に外部講師を招き、演劇ワークショップを開催した。短いセリフを読む活動のなかで腹から声を出したり、与えられた役柄になり切って台詞を読んだりする活動を行った。ワークショップ後の感想に「おなかから大きな声を出すという経験は、部活動などの対外的な場においても応用できる」と書いた生徒もいた。

第Ⅱ期「人と関わり、社会で生きる」は、マナー講習会、訪問先への事前電話、5日間の職場体験、礼状書き等、職場体験関連の活動期間にあたる。演劇ワークショップでの表現方法に加え、職場体験の事前学習として位置付けられたマナー講習会での言葉遣いや作法などを職場体験先の事業所で学ぶこととなった。

第Ⅲ期「自分の地域を知り、外に向けて発信する」は2つの活動から成り立っている。1つ目は三和区の地域協議会に向けて生徒が考える三和区の課題や今後の提言を伝える活動である。もう1つは2年生の3月に修学旅行先で行う異文化交流会である。異文化交流会では、自分の出身地のお菓子を持ち寄り、食をきっかけに各地域を紹介し合った。2つの活動に共通することは、その相手がいずれも初対面であり、なおかつ世代の異なる人であること、さらに、自らの地域に関する情報を発信する力が必要とされるということだ。異文化交流にいたっては、パレスチナやウクライナ、イランなど英語圏ではない方と交流するということもあり、翻訳アプリを用いて会話を行うといった新たなコミュニケーションを試みた。この試みを実現する前に、修学旅行前にあらかじめ三和中学校で勤務するALTと英語翻訳アプリを用いて交流を行い、活用方法を事前に確認した。第Ⅲ期のねらいは、自分の意思を伝えることの難しさを実感し、伝えるために準備が必要であることを学ぶことにあった。そして第Ⅲ期の学習内容は、そのまま第Ⅳ期の「演劇公演の準備」のために必要な知見として機能することを期待した。

第Ⅳ期「これまでの学習を関連付ける」は、第Ⅰ期から第Ⅲ期にいたる様々な活動の中で、自分に与えられた役割を果たし、自己表現を大いに促す活動期とした。演劇公演のためのポスターの製作、演劇で取り上げた谷内池啓発ポケットティッシュのデザインづくり、老人施設訪問、三和まつりに向けたうちわデザイン制作、祭り当日のたる太鼓演奏や上越サンバの踊り披露など、地域に向けて、多岐にわたる役割をそれぞれが引き受け、様々な表現方法で発信することを通じて、「人間関係、社会形成」「自己理解、自己管理」「課題対応」「キャリアプランニング」というキャリア教育において育む4つの資質の総合化を具現化することをねらうこととした。

② 三和区まちづくりワークショップの活動と演劇公演

上越市では数年前から、各中学校区の育成協議会と中学生が協力する「まちづくりワークショップ事業」を推進してきた。キャリア教育の最終地点とした演劇公演は、地域住民に対しても公開することから、演劇をまちづくりワークショップの活動に盛り込み、三和区育成協議会と協力しながら演劇をつくることとした。演劇のシナリオ作成では、育成協議会メンバーに三和区の歴史や民俗文化財、自然環境などに関するヒアリングを行った。ここで得られた情報をもとに演劇指導を担当する外部講師を中心に3学年部職員でシナリオを作成した。三和区小中学校区全体で目指す子どもの姿が「ふるさと三和を愛するこども」であることから、三和区の良さを再認識できる内容にすることをねらい、県の自然環境保全地域に指定されている中学校の裏手に広がる谷内池を取り上げることにした。また、育成協議会メンバーからも役者として参加していただき、生徒と共に演劇をつくり上げていった。演劇終了後、谷内池の水生植物の環境保全をどのように進めるかを考え、後輩に引き継ぐための準備を進めることとした。

6 考察

(1) アンケート結果より

表1 生徒用学校評価アンケート結果（平成30年及び令和元年7月実施）

	平成30年	令和元年	
進路学習や学活の時間などで、自分の「将来の生き方」について考えることができたか。	71%	78%	↑
道徳の時間や体験活動を通して、周りの人たちを思いやる気持ちをもつことができたか。	94%	97%	↑
あいさつや言葉遣いに注意して生活することができたか。	91%	97%	↑
学校の様々な活動で、地域（三和の自然・モノ・人）とふれ合う場面を通して、今までより、ふるさと三和への関心が高まったと思う。	86%	91%	↑

表1は、毎年1学期末に実施する生徒用学校評価アンケートの結果のなかで本実践に関わる資質に関する4つの質問項目について、H30年度（中2時）と令和元年度（中3時）の肯定的回答の割合を示したものである。表1から、各質問に対して肯定的回答をした生徒の割合が、前年度に比べて向上していることが確認できる。また、3年生の7月に1

年間にわたる総合的な学習の振り返りの集計結果（表2）によれば、生徒は総合的な学習の時間に行なった様々な活動を通して「コミュニケーション力」「共感する力」など対人関係の構築や維持に資する有用性を認めていたことが確認できる。

この他、自分の将来に関する質問項目「自分には良いところがある」「難しいことでも失敗を恐れずに挑戦しようと思う」「自分の将来に対してそれほど悲観していない」について、4段階評価を行ったところ、そのいずれの項目においても、8割以上の生徒が肯定的な自己評価をしている。

以上の結果から、見通しの立ちにくい将来に対して前向きな姿勢で臨もうとしている生徒が多いことが確認できた。

(2) 抽出生徒A男³への着目

A男は、入学当初、相手に対して配慮のない尊大な言動をすることが多く、仲間と良好な関係を築くことができずにいた。また、学習意欲もさほど高くなく、家庭での学習習慣も身に付かぬまま2年生へと進級した。以下、A男が、演劇公演へと至る様々な活動を通して、どのように変容したかを本人が書いた文章や言動をもとに検討する。

中学2年の4月時点でA男は「私の夢」作文で、次のように記述している。

皆さんはどんな将来の夢がありますか。僕はまだありません。なので、僕は自分の将来の夢がほしいです。将来の夢がほしい理由はいくつかあります。1つ目は、自分の将来の夢がないとどんな場所に進学したり、就職したりするかを決めることが難しくなるからです。自分のしたいことや自分の将来の夢によって、高校や大学、専門学校を決める人が多いと思います。でも、それがないと決めることが難しくなると思います。2つ目は目標がないと何事にも真剣に取り組めないことです。「どんなことがしたい」「どんな仕事につきたい」などの目標があることで、それに向かってがんばって勉強をしたりできると思います。でも、そういった目標がないとあまり真剣にできないと思います。

A男は「今は夢がないからがんばれないけれども、夢が見つければきっとがんばれる」と考えていた。将来就きたい職業が漠然としていたこともあり、職場体験の訪問先は明確な理由もないまま卒園した保育園へ訪問した。中学2年生の夏休みから戦争などの歴史に興味を抱くようになり、読書や映画鑑賞を通して、疑問に思ったことを話題にするようになった。したがって、3月の修学旅行の異文化交流会で紛争地域の留学生と交流できることに期待を膨らませていた。異文化交流会当日の感想発表の際、A男は「英語を話せるようになって、もっといろんな人と話がしたいです。そのために、英語の授業をしっかりと受けようと思います」と自らの語学力のなさを痛切に感じたことを打ち明けた。また、修学旅行のしおりには、次のように書き記した。

パレスチナ、レバノンの人と話した。特にパレスチナは内戦や紛争が続いていて、普段聞けない話が聞けるのではないかと思った。その人は英語が話せるそうでしたが、うまく会話をすることができなかった。英語の授業では聞かない単語が出てきたり、スピートが早かったりして、分からないところがあった。

パレスチナ国内の話はパレスチナに住んでいる人にしか聞けないこと。しかし、こんなチャンスを自分の英語の未熟さでつぶしてしまうのはとてももったいない。だから、私は次のチャンスが来るまで、失敗を恐れずに、自分から話をして、もっと他の国の歴史や英語の力を身に付けていきたい。

A男は3年に進級後、英語の学習に力を注ぎ、英語検定の資格をとろうと意欲的に学習に取り組んだ。また、政治的な問題への関心をもつようになり、朝学習の時間に人権問題や国際平和に関する本を好んで読むようになった。

一方、演劇公演に向けた練習では、A男は台詞を覚えることに苦しんだ。当初、「なぜこんなことをするのか」と口にするのもあったが、徐々に熱が入り、演劇練習以外の時間にも、舞台に必要な物品づくりを小道具係に依頼したり、ダンスの練習を復習したりする姿が見られた。演劇公演についてA男は次のように記している。

表2 様々な活動を通して大切だと思う力（複数回答可）

1	コミュニケーション力	87.1%
2	共感する力	58.7%
3	先を見通す力	32.3%
	継続する力	32.3%
	発想力	32.3%
4	想像力	29.0%
5	忍耐力	25.8%
6	幅広い知識	22.6%
7	独自性	19.4%
8	ユーモア	16.1%
	体力	16.1%

³ 筆者はA男を3年間、学級担任として受けもち、人間関係の変化や将来への展望等に気付きやすい立場にあった。さらに、各活動を振り返るワークシートが詳細に記載されており、筆者の見取りを越えて、客観的データとして活用できると判断し、抽出した。

最初の方は、セリフを間違えてはいけないと思っていたから正直、嫌だった。でも、練習していくうちに楽しくなってきた、その時にはセリフがあっているかどうかは気にならなくなっていた。…中略…この演劇を通して、裏方の人の役割がどれだけ大切かということがよく分かった。

また、3年生の1学期末に行った「総合的な学習における様々な活動を通して、大切だと思った能力は何か」という質問に対し、多くの生徒が「コミュニケーション力」「見通しをもって実行する力」などの選択肢に丸印をつけたのに対し、A男はすべての選択肢に丸印を付け、「それぞれの力が関係していることが大事」と補足した。A男が能力とは単独で発揮されるものでなく、それらが関連付いた時に発揮されるととらえていることがうかがえた。

入学当初、周囲への配慮のない言動から良好な人間関係を築けずにいたA男だが、様々な活動の振り返りを通じて、思考や行動に変化が見られた。具体的に、異文化交流体験後の英語への意欲的な取組、政治的問題への関心の広がり、差別されてきた人へのまなざし、演劇後の仲間との関わり方などである。彼の変容を本実践の成果とみなすことができるかどうかは別にして、以上のことをキャリア発達の軌跡として評価することは可能であるように思われる。

7 今後の課題

最後に、本研究から得られた課題は2点ある。1点目は、本研究は学年37名の集団に対して行われた1年間にわたる実践事例に基づいており、その知見は極めて限定的な範囲の中から導かれているという点である。加えて、抽出生徒A男の変容に関する記述についても、観察主体の立ち位置の影響を完全に免れることができない。こうした事情から、本研究の考察は量的調査としても、質的研究としても客観的で信憑性のある結果を得ているとは言いがたい。今後、大規模な学年集団で量的調査を実施することを通じて、信憑性のある数値を基にした考察を加えていく必要がある。

2点目は、キャリア教育において目指すべき資質・能力に関わる課題である。例えば職場体験で失敗したという経験が後に、本人の成長を促す契機となったり、成功体験が成長を拒んだりすることもあり得る。ただし、こうした側面を逆手に取ってしまえば、いかなる教育実践も前年踏襲でよとする風潮が広がることも懸念される。こうした事態を回避するためにもキャリア教育の実践において、どのような資質・能力を身に付けさせるべきかについて子どもの実態に即して職員間で検討する場が必要となる。今後、各人の個人的な経験知を組織的な実践知へと高められるような連携に努めていきたい。

引用・参考文献

- 天野慎也「中学校におけるキャリア教育としての生徒会活動の展開：学びのプロセスを中心にして」『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』28巻、2019年、343～352 pp
- 大本久美子・坂本直花「中学校技術・家庭(家庭分野)における『職業・生活キャリア』を育むカリキュラム開発」『生活文化研究』Vol.56、2019年、1～11 pp
- 大矢一人「『総合的な学習の時間』に関する学生の認識」『藤女子大学QOL研究所紀要』Vol.12, No1., 2017年、45～59 pp
- 小川潔・岡田大爾「キャリア教育と基礎的・汎用的能力の重要性－特別活動を要とした教育課程編成を通して－」『広島国際大学教職教室 教育論叢』第10号、2018年、45～52 pp
- 川野哲也「演劇教育とアレントの公共性概念」『山口学芸大学』第4号、2013年、1～13 pp
- 但田勝義「中学校におけるこれからのキャリア教育と大学との連携～『総合的な学習の時間』(職場体験等)に注目して～」『稚内北星学園大学紀要』第18号、2018年、7～18 pp
- 中央教育審議会答申「今後の学校教育におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」、2011年
- 富田博之『演劇教育』国土社、1958年
- 藤原直子「キャリア教育に何ができるか－変わる職業観と人生キャリア－」、早川操・伊藤彰治編『教育と学びの原理 変動する社会と向き合うために』名古屋大学出版会、2015年、67～82 pp
- 吉岡友治『だまされない〈議論力〉』講談社、2006年
- 吉川徹・中村高康『学歴・競争・人生10代のいま知っておくべきこと』日本図書センター、2012年
- ベルグゼン、U、漕谷啓介訳『プラスチックワード－歴史を喪失したことばの蔓延－』藤原書店、2007年